

《東京都》

第64回東京都小学校音楽教育研究大会

都小音研 研究主題「つなげよう 深めよう 生かそう 音楽の学びを」
山の手Cゾーン大会「つなげよう 広げよう 生かそう 私たちの音楽」

都小音研の研究主題は、学習指導要領の改訂とともに、令和元年度の全日音研総合大会小学校部会研究大会から設定している。残念ながら、昨年度の多摩南ゾーン（八王子市・調布市・狛江市・府中市・多摩市・稲城市）大会は紙上発表となったが、その一冊から新たな段階に進んだ授業をイメージすることができた。学習指導要領を抛り所に途絶えることなく進めている研究は、本年度、山の手Cゾーン（大田区・品川区・目黒区）大会へと受け継がれている。

1 研究主題設定の理由

「小学校学習指導要領解説音楽編」において、音楽科で育成を目指す資質・能力は「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」と示されている。また、資質・能力の三つの柱「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の育成を目指すために、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を図ることが求められている。

山の手Cゾーンの児童は、様々な音楽活動を通して、音楽に親しみながら楽しく表現したり、音楽を楽しんで聴いたりすることができる。導上の課題について、「主体的・対話的で深い学び」の枠組により、以下の通り整理した。

「主体的な学び」では、児童が自ら目標をもって学習課題を見付けたり、題材を通して学習の見通しをもち続けたりするための工夫が課題であった。また、聴き取ったことと感じ取ったことを的確に捉えて言葉で表す、思いや意図を実際の音楽表現に生かすといった

学習場面で、粘り強く学習に取り組めるような指導の工夫が必要であることも分かった。

「対話的な学び」では、友達と協働して課題を解決したり表現を工夫したりして学びを広げ深める学習場面や、音楽のよさや美しさを共有しながら聴き深める学習場面が少ないことが分かった。

さらに、これまでの学びの積み重ねを活用して、音楽表現や鑑賞の学習を深められるようにすることや、本題材で学んだことを次の題材や他の領域・分野で生かせるようにするための指導の工夫が必要であることも分かった。

そこで、目指す児童像を次のように設定し、「つなげよう」「広げよう」「生かそう」をキーワードに、研究を進めることとした。

- 課題意識をもち、粘り強く学習を積み重ねて主体的に音楽活動に取り組む子
- 協働する中で自分の考え方や感じ方を広げて、音楽活動を共に楽しむ子
- 学んだことを活用し、次の学びに生かすことができる子

「つなげよう」とは、児童が題材の始まりから終わりまで課題意識をもち続け、実感を伴った活動を積み重ねながら、主体的な学びを最後までつなげて学びを深めていくことである。学習課題に即した音楽活動を通して「なるほど、そうか」と実感を伴って理解したり、「自分の思いや意図を表すことができた」という実感をもって表現したりする学習活動を工夫することが大切である。また、表現に必要な基礎的な知識及び技能を身に付けられるようにしたり、題材構成を工夫したりすることも、主体的に学ぶために不可欠である。

「広げよう」とは、児童が他者との対話を通して学びを広げながら深めていくことである。協働的な活動を通して、他者の考え方や感じ方に触れ、音楽的な気付きを広げ、自分の考えをより明確なものにすることができる。そのために、他者と交流しながら思いや意図をもった表現を実現したり、曲を聴き深めたりすることができる学習場面を設定することが大切である。

「生かそう」とは、児童がつなげ、広げ深めてきた学びを積み重ね、次の学びに生かしていくことである。そのためには、学習の系統性を明確にした題材の指導計画や年間指導計画を立てるとともに、児童の学習状況を十分に把握した適切な指導と評価であったかを教師自身が振り返ることが必要である。また、「音楽的な見方・考え方」を働かせた深い学びとなっているかという視点で、学習全体を見直すことも重要である。

以上のことから、児童が目標を見いだし、見通しをもって学びを「つなぎ」、対話的な学習を通して考えや思いを「広げ」たり深めたりしながら、身に付けた力を「生かして」より豊かに音楽と関わっていくことを目指し、大会主題を「つなげよう 広げよう 生かそう 私たちの音楽」と設定した。

2 研究内容

視点1 課題意識をもち、学びを最後までつなげて深めていくための工夫

児童が、題材の始まりから終わりまで自分の目指す音や音楽を見いだし、自らの学習を調整しながら主体的に学習に取り組むために、次の手だてを工夫する。その際には、題材における思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくっている要素を明確にして、児童が課題意識を持続できるように題材構成を工夫する。さらに、児童が必要な知識及び技能を獲得し、既習事項として身に付け、課題に応じて使えるようにしていく。

◇見通し・振り返りを位置付けた学習過程

児童がこれまで学習したことを活用しながら、題材の始まりから終わりまで課題意識をもち続けて学びを積み重ねることができるように、学習過程を工夫する。そのために、まず音楽との出会いを大切に課題意識をもてるようにする。そして、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何が身に付いたか」を明確にしながら、学習の見通しをもつ場面、学びを振り返り自己の変容を意識できる場面を設定する。

◇実感を伴った学習活動

「この曲にはこんな特徴があることが初めて分かった」「演奏の工夫をすると表現がこんなに変わるのか」といった実感を伴った学習活動により、児童は課題意識を持続することができる。課題意識が持続するからこそ、思いや意図をもった表現を実現したり、音楽のよさや美しさを聴き深めたりしながら学びを深めていくことができる。実感を伴って試行錯誤できるような「比較する」「関連付ける」「言葉や体の動きなどで表す」等の具体的な手だてを工夫する。

視点2 考え方や感じ方を広げて深める学習活動の充実

表現や鑑賞の学習活動の中で、音楽表現に対する思いや意図、音楽を聴いて気付いたことや感じ取ったことなどを友達と伝え合い、他者の考え方や感じ方に共感しながら、自分の考えを深めることができるようにする。また、主体的な学びと関連付けて学習することが大切であることから、視点1との関連を図りながら学習活動の充実を図る。

◇他者の考え方や感じ方に触れる学習活動

児童同士、児童と教師、地域の人や専門家との対話、先哲の考え方を手掛かりにするなど他者の考え方や感じ方に触れ、新たな考えに気付くことができるよう、学習形態や交流の仕方を工夫する。交流の際、音や音楽で実際に試して確かめたり、聴き取ったことや感じ取ったことを体の動きなどで伝え合ったり

することで、自分の考えを広げ、深められるようにする。

◇聴き取り、感じ取ったことを交流するための言語活動

児童の気付きを、教師が音楽を形づくっている要素と関連付けながら価値付けることで、児童の思考・判断のよりどころとなるようにする。また、板書や掲示物、ワークシート、話型の活用の仕方などを工夫することで、友達や他者の考え、感じ方に共感しながら自分の考えを広げ、深められるようにする。

視点3 学びを次の学びへ生かしていくための工夫

児童が学んだことを振り返り、どのように生かしていくかについて考えることができるように、育成を目指す資質・能力のつながりを視点にして、学習の系統性を明確にした指導計画を立てるようにする。また、児童が深まった学びを次へ生かしていくために指導と評価の仕方を工夫する。

◇学びのつながりを考慮した指導計画

これまでの学びを生かしたり、今の学びを次に生かしたりするために、本題材を中心に資質・能力の系統的なつながりを学びのつながりとしてまとめ、学習指導案に記載する。指導計画を立てる際にこの系統表を活用し、つながりがあると考えられる題材の学習内容や学習活動を想起させる場面等を意識的に設定する。それにより学びにつながりが生まれるようにする。

◇指導と評価の一体化

題材の指導計画を立てる際、「学びが深まった児童の具体的な姿」「努力を要する状況への手だて」を想定し、学習指導案に記載することで、一人一人の児童の状況に対応し、次の学びにつながる評価を行う。

3 研究の方法

(1) 授業研究及び協議会

- ・各地区の授業研究と協議会、事前研究会の実施と研究内容の共有

- ・大会授業の学習指導案の作成
- ・年間指導計画及び評価計画の作成

(2) 研究演奏

- ・研究内容を踏まえた事前研究会と歌唱器楽などによる研究演奏

(3) 研究発表

- ・ゾーンの研究のまとめと各区の取組による発表

4 研究の成果と課題

視点1では、音楽との出会いを大切にすることで、自ら課題を見つけたり設定したりすることにつながった。振り返りを充実させることで、身に付いた学びが明らかになり、達成感をもって次の学習に意欲がもてるようになった。これらの手だてにより、児童の思いや意図が明らかになり、課題意識をもち続けることができた。

視点2では、タブレット端末を活用して気付いたことや感じ取ったことを伝え合うことで、自分の考えを広げ深めることにつながった。音楽を形づくっている要素と関連付けたり価値付けたりすることで、表現や聴き方を深めることにつながった。

視点3では、資質・能力の系統表を作成し指導計画を立てる際に活用することで、学習の関連を明確にすることができた。学習指導案の評価計画に、Aと判断される児童の状況やCと判断されそうな児童への手だてを明記することで、次の学びに生かす評価ができた。

今後も、主体的に学んでいくための音楽との出会いの工夫、学びの実感を伴った学習活動、本研究で試みた系統表の検討を継続し、その有用性について検証、授業改善をしていく。

今回の山の手Cゾーン研究大会を通して得られた成果や課題は、来年度の山の手Dゾーン（世田谷区・渋谷区・町田市）大会へと受け継ぐ。今後も東京都の小学校音楽教育を支える原動力として、ゾーンでの研究大会を推進していく。